

海外の公園事情

7

アメリカ マンモスケイブ 国立公園

JICA海外長期研修中
鈴木 渉

牧場だった国立公園

米国の国立公園といえば、原生の自然環境を誇る広大な自然公園が多いが、中には過去に人が生活していた公園もある。そのような風変わりな国立公園をご紹介します。

マンモスケイブ国立公園は、ケンタッキー州中部のカルスト台地に位置する面積約二二三平方キロメートルの国立公園で、地下には世界で最も長い鍾乳洞（総延長約五九〇キロメートル）が存在する（図1）。一九四一年に国立公園と

して正式に開設され、その後ユネ

スコにより世界遺産（一九八一年）、生物圏保護区（一九九〇年）にそれぞれ指定されている。鍾乳洞の一部は一般にも開放されており、レンジャーによる有料ガイドツアーの参加者は年間のべ五〇万人にのぼる。また、公園の地上部は米東南部特有の落葉広葉樹林に覆われ、トレイル、キャンプ場、ピクニック広場などが整備されている。トレイルは一部を除き乗馬が可能で、馬用のトレーラーが停められる駐車場、馬が嫌がらないよう配慮された木橋、さらにバツ

決議した（註2）。当時、マンモス

ケイブには五〇〇家族以上が居住し、地域のほとんどは牧場として利用されていたが、国立公園化に際し学校や住居などの人工物はほとんど撤去され、現在では教会や墓地がその名残として残されている

のみである。

科学・資源管理部門

マンモスケイブ国立公園には、所長の下に所長秘書室、渉外・広報部、インタープリテーション（自然解説）・ビジターサービス

クカントリーキャンプサイトには馬をつなぐための支柱まで用意されている。公園を流れるグリーン川及びその支流のノーリン川（合計約五〇キロメートル）は、流れが穏やかで初心者でもカヌーを楽しむことができる。また、公園区域内に限りケンタッキー州の遊漁証がなくても釣りが可能であるため、釣り客のポーターも多い。公園内には橋梁がなく、代わりに小規模なフェリーボートが二台運行されている（註1）。これらのフェリーの他、乗船場が一箇所整備されていて、計三箇所からボートやカヌーを川に浮かべて釣りやカヌーツアーを楽しむことができ。このように、鍾乳洞以外にもいろいろな魅力があり、また比較的市街地から近い立地の良さもあって、多くのビジターが訪れている（二〇〇一年度の公園全体の利用者数はのべ約一九〇万人）。公園内の利用に関する情報はビジターセンター（図2、写真1）で提供されている。

公園の区域は、国立公園が開設される以前は民間の所有であった部、メンテナンス部、科学・資源管理部、レンジャー活動（法執行）部及び管理部が設置されている。私が現在所属し研修を行なっている科学・資源管理部は、公園内の自然・文化資源の調査・研究、モニタリングなどを行なっている部門で、一六名の正規職員が勤務している。特に、GIS（地理情報システム）の専門職員がいることは特筆すべきことで、公園内のモニタリングや調査の結果が一次的にGISデータとして管理されている。

この公園は鍾乳洞が有名であるが、意外にも自然環境管理の重点は地表の自然環境管理に置かれている。過去に牧場や集落のあったエリアも、国立公園として保護されてきた結果、この地域でも有数の森林が発達している。七面鳥の再導入プロジェクトも成功し、公園のあちこちにシカ、七面鳥が出没してビジターの目を楽しませてくれる。現在もアメリカンチェスナッツ（註3）をはじめとする各種動植物の再導入プロジェクトが進められている。

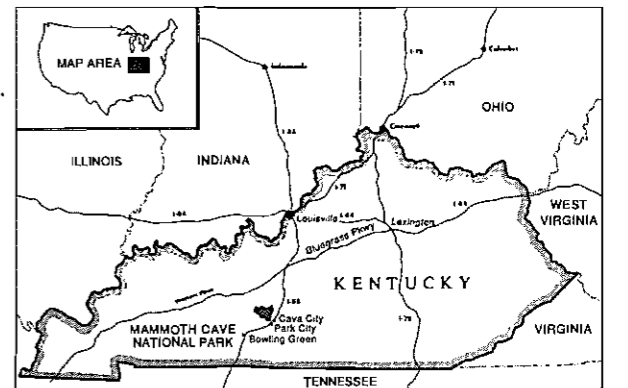


図1 マンモスケイブ国立公園の位置図

が、一九〇〇年代初頭に民間の観光開発が加熟したことを契機として国立公園設立の機運が高まった。開発競争は「ケイブ・ウォー」と呼ばれ、その結果一九二五年に発生した著名な洞窟探検家フロイト・コリンズの死亡事故の模様は、当時普及したばかりのラジオで二週間にわたり実況報道され、全国民の注目を集めた。この騒動がきっかけとなり、一九二六年に連邦議会が「連邦政府の出資によらず公園区域内の土地が取得できない場合に」国立公園とすることを

パークレンジャーとは？

ところで、「パークレンジャー」とはどのような人たちなのだろうか。正式に「パークレンジャー」の肩書きを持つのは、レンジャー活動部門の職員（公園内の警察官）のみである。ビジターに対しては、自然解説を担当する職員も、「パークレンジャー」と紹介されているが、彼（女）らの正式な肩書きは「ガイド」である。とはいえ、国立公園局の職員は、ガイドから施設管理職員（メンテナンス）まで全員グリーのシャツにグリーンのパンツを制服として着用しており、利用者から見ればそのような職員はすべて「パークレンジャー」であり、国立公園の「顔」といえる（註4）。このレンジャーのイメージを維持するために、かなりの予算と労力が費やされているという印象を受ける。例えば、採用された職員に対しては、まず制服代として四五〇米ドルが支給される。以降、春秋各一六〇米ドル、合計年間三二〇米ドルの手当てが支給されるが、制服のカタログを見せてもらうと、その程度の手当てだけでは到底そろえられないほ

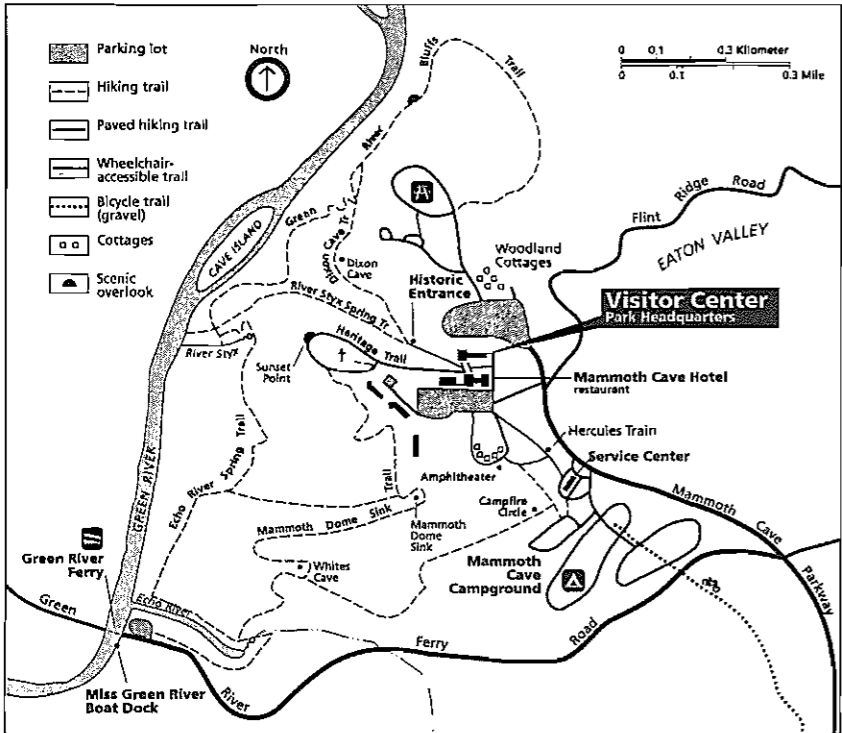


図2 ビジターセンター周辺の地図

どバラエティーが豊かである。また、古くなった制服を途上国に送り、レンジャーの制服として再利用するプログラムもあり、アフリカや中南米諸国の国立公園に寄贈されている。

それにしても国立公園には職員が多い。正規職員には常勤職員と臨時職員があり、二〇〇三年八月二二日現在で公園の職員数は一八七名、うち常勤職員は八七名である(註5)。夏期の最盛期には二五〇名程度、冬期は一四〇名程度で、前述の常勤職員以外は臨時職員として雇用されている。メンテナン部門は常勤職員の割合が高いのに対し、インタールプリテーション部門は臨時職員数が多い。このため、夏期にビジターセンターで見

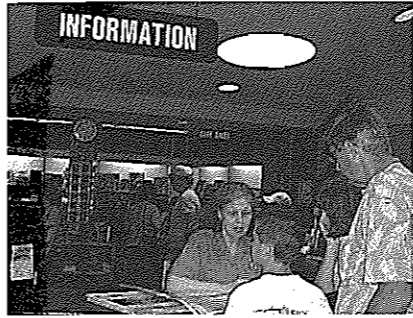


写真1 ビジターセンター内部(インフォメーションデスクと図書コーナー)

局では徴収料金の八〇パーセントを各国立公園が使用することができ(註6)。マンモスケイブ国立公園でも、この制度により公園内の標識やキャンプサイトの再整備、車道の付け替えなどが進められている(註7)。

一方、徴収料金が予算に直接影響することから、プログラムの収益性に重点が置かれ、料金の高騰、利用者の集中、過度の施設整備などを招く傾向がある。また、この予算は議会の承認を要しないため、国民の監視が行き届かないというおそれもある。さらに、使途が施設の更新に限られているため、更新後の施設の維持費用(電気、水道、汚泥処理費用など)は通常の公園予算から支出せざるを得ず、結果として維持費用の増額が通常予算を圧迫している。また、利用者サービスに関係する職

かける職員の多くは臨時職員で占められることになる。このような短期雇用職員のために、公園内には家具付きの専用の宿舎が整備されていて、到着した次の日からでも業務を開始できるよう配慮されている。

職員が多いとはいえ、人件費は徐々に削減されており、特に常勤職員の多いメンテナン部門では外注工事の割合が大きくなってきている。また、モーニング(芝刈り)は現在も正規職員の業務であるが、公園内道路の路肩の芝刈り幅を両側二メートルに限定するなどの業務合理化が進められている。個人的には、公園内の路肩が立派な芝生に覆われていること自体違和感を覚えるが、「ブルーグラスステート」と呼ばれるケンタッキー州では、公園内に限らず芝生が大変よく管理されており、芝に刈り残しがあるというのはこちらの職員からすればかなり思い切った削減策のようだ。

このような人員削減の影響もあってか、公園ではボランティアやインタールンなどのスタッフを積極的に活用しており、受け入れ態勢もよく整備されている(註8)。

員の雇用にも充当できるが、プログラムを数多くこなして収益性を上げるためには、どうしても前述のような臨時職員の比率が高くなる。その多くは長期アルバイトの学生であり、知識に裏付けられたベテランガイドの自然解説に出会える確率は低くなっている(註9)。利用が夏期休暇シーズンに集中するために業務に繋がりがあること、結果として若者への門戸が広がったことなどの利点もあるが、この制度については賛否両論あることも確かである。

とはいえ、当面大幅な税収の伸びが期待できない米国の経済状況から考えれば、このような制度は公園の利用者サービスの維持に欠かせない。フリーデモプログラムが今後の米国の国立公園の「質」にどのような影響を与えるのか興味深いところである。

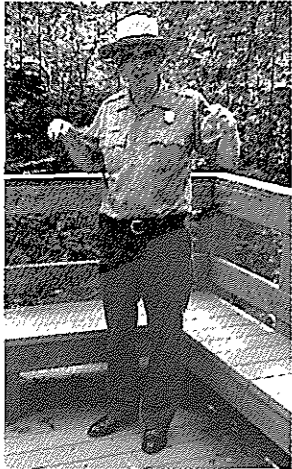


写真2 ベテラン「臨時職員」ガイドのジョーさん

(マンモスケイブ国立公園の鍾乳洞、また職種によって様々な種類の制服を着用した職員の写真を巻末にカラーで掲載。)

ボランティアは基本的に無給であるが、場合により食費、ユニフォームが支給され、公務中のけがについては、治療費も公園が負担してくれる(註10)。マンモスケイブ国立公園には長期のボランティア用の宿舎が一棟あり、最大三名(組)が滞在できる。ボランティアの多くは学生や退職した老夫婦などであるが、そのような人達はボランティア活動を一種のレクリエーションの一種と考えているようである。なお、二〇〇二年度のボランティアの総数は六二〇名で、勤務延べ時間は三一、八一二時間に及ぶ(うち、二二、八九三時間は資源管理業務)。公園が負担した費用は四、五〇〇米ドルで、金額の大きなものはユニフォーム代(二、〇八〇米ドル)、食費(五〇〇米ドル)などである。

これに対して、インタールンはいわば職員としての身分を持たない賃金職員で、その雇用形態は様々である。例えば、SCA (Student Conservation Association) インタールの待遇はボランティア程度(基本的には無給)であるが、三ヶ月の勤務により奨学金として一、〇〇〇米ドル程度がSCAよ

り支給される。国立公園局は在学中もしくは大学を卒業した若者をSCAインタールンとして雇用し、勤務時間に応じた奨学金相当額をSCA組織に対し支払う。学生はインタールンにより経験を積みながら、奨学金と大学の単位を取得できる。二〇〇二年度のSCAインタールン総数は一名、のべ勤務時間数は五、二八〇時間であった。

なお、国立公園局の職員は上級職員を除き異動のほとんどはポストへの応募制で、希望しない限り同じポストに好きだけ留まることのできる。地元出身者が多いマンモスケイブ国立公園では、一〇年以上同じポストに勤務している熟練職員も少なくない。職場の雰囲気も家庭的で勤務環境がいいというのが臨時職員やボランティアの評判である。

フリーデモプログラムの導入と公園の「質」の変化

フリーデモプログラムは、これまで国庫に納付していた国立公園の入園料や有料プログラムの徴収料金をそのまま各部署の独自財源とする画期的な制度で、国立公園

(脚注)
註1：国立公園化される以前は多くのフェリーボートが運行されていたが、現在残されているのは二箇所のみ。橋梁に比べ景観への影響が小さいこと、商業車両の公園内の通過交通量を抑制できることなどのメリットがある。

註2：連邦議会の決議を受け、ケンタッキー州議会は、土地取得のための取付権を有する団体として一九二八年に「ケンタッキー国立公園委員会」を設置し、主に民間からの寄付金により土地購入が進められた。

註3：学名は *Canadensis detrita*。米東部森林の主要な構成樹種であったが、一九〇〇年代初頭アジアからの輸入材から感染したクワの菌類病によりほとんどの個体が枯死している。公園の中には今でも萌芽更新している個体が見られ、再導入の試みが積極的に行なわれている。

註4：実際には制服にもいろいろな種類があり、職種に応じて大きくクラスA(ホワイトカラー用)、クラスB(ブルーカラー用)に分けられている。前者には公式、準公式、執務用及び作業用、後者には執務用及び作業用の別がある。さらに女性にはマタニティー用の制服、ライフガード用には各種水着が用意されている。クラスAハットはクラスA用の設定だが、クラスBにはウェスタンハットが用意されていて、いかにも米風らしい。

註5：ここで正規職員としているのは、連邦職員の地位を有している職員。臨時職員は常勤職員と異なり、年金や生命保険などの制度が適用されない。臨時職員には季節雇用と臨時雇用(二つの雇用形態がある。前者は年間雇用期間が六ヶ月を超えられないが、同人物を毎年雇用することができ、後者は年間六ヶ月を超えて雇用できるが、同人物の雇用期間合計二年間までに限定されている。これらの正規職員の募集は政府の雇用情報を通して行なわれる。

註6：国立公園局のホームページ (<http://data.licmngs.gov/volunteer/dypankctm>) では各国立公園のボランティア募集情報が一覧でき、申し

込みもできる。募集情報には仕事の内容、住宅などの福利厚生、条件などが記載されている。

註7：実際には、Federal Employees' Compensation Actに基づき、労働省が治療費を支給。

註8：米国の国立公園は一九九〇年代に深刻な経費不足に見舞われ、歩道や標識の荒廃、歴史的な建築物の補修の遅れなどが顕在化した。このため米国議会は一九九六年にフリーデモプログラム (Recreational Fee Demonstration Program) を承認し、翌一九九七年より内務省の国立公園局、森林局等レクリエーションに関係する料金を徴収している各部署に導入した。この制度は二〇〇四年までの期限付きであり、機軸可能期間が終了する二〇〇七年九月までにすべての予算を執行する必要がある。

註9：マンモスケイブ国立公園では入園料は徴収されないが、有料のケイブツァーから得られる収入は約一、一百万ドル(約一、三億円)、二〇〇二年度であり、この収入を除く年間の通常予算(五、七百万ドル、約六、八億円、二〇〇二年度)の約二パーセントに相当する。

註10：もちろん臨時職員にはベテランガイドもいる。合計四二年間にもわたりマンモスケイブのツアーガイドをしている元教師のジョーさん(写真2)は、この国立公園の公の立て役者であるフロイト・コリンズ(註2を参照)の研究者でもあり、その豊富な知識と人を引きつけるガイドトークは素晴らしい。臨時職員のポストは、このような人材を発掘して活躍の場を与えるという役割も果たしている。

鈴木 渉 ● すずき わたる
一九九四年環境庁に技官として採用される。
二〇〇三年四月よりJICA海外長期研修制度で米国のマンモスケイブ国立公園にて研修中。